



近世说美女集  
 三編  
 四



~ 13  
 3567  
 14





門 13  
號 3367  
卷 14

近世説美少年録第三輯卷之四

東都 曲亭主人編次



仙術を示して舌命哄騙を  
丹洲と成せし福富指を添

復説福富大夫次之金剛禪士  
道人とその側室小池と伴之連の略  
次之を宿所近き一日一個の伴當を走らし七件の緯の趣とて阿健の  
告たりり阿健の奴婢們に分付て形のとく準備とらん今之と俟程ふとの  
日哺時の比及ふ大夫次之舌命と俱しく宿所へ入り呈見せしめ今朝より迎の爲ふ  
と途を歩る里人と奴婢們的奔走混雜とてさうゆめありしと大夫次之を見  
被けをさかす舌命を倡ひ立ち小槌の便輿に乗したる依庭口より昇容すとて  
打出丁見の共侶とて離舎(案内する主人態等困るる賓客儲の豫る阿

美少年録第三輯卷之四

東都 曲亭主人編次



鍵の心を用ひし。給使の小斯養娘が。茶を肴め又果子を薦め。却るの後。風爐に  
 浴れ。夕饌酒肉。これ彼と管待。丁寧なれば。客の主人も。あつた。長途の疲勞を  
 ぬく。あつた。舌の前。履をこれに。多枕を。就ける。倦而る。夜。大丈次の。阿健。舌命の  
 縁由。箇様々。と。其。示して。那人の。清浄。と。昔。千の。公。驗者。小。女。子。の。憚り。あ。へ  
 たる。飲。翌。より。と。逗留。中。且。母。の。応。對。の。儀。做。下。娘。婦。の。萬。丈。の。機。と。屬。て。管。待。を。盡  
 虧。ひ。て。那。人。の。元。俺。家。の。浩。大。黒。で。ま。ま。か。と。の。阿。健。の。あ。ろ。ろ。と。舌。命。の。小。櫃。們。も。  
 一番。の。對。面。を。給。使。の。天。國。丸。十二。三。多。親。娘。と。小。斯。の。侍。ら。と。い。く。疎。畧。多。る。  
 然。程。小。大。丈。次。の。次。の。朝。も。間。々。時。々。離。合。不。赴。た。と。舌。命。と。訪。尉。心。め。る。語。次。  
 煉。金。の。修。法。を。請。ふ。已。ま。り。と。舌。命。の。然。る。と。領。え。て。の。爰。の。催促。せ。れ。ども。貧  
 道。既。不。用。意。の。且。八卦。爐。を。造。る。一。因。て。方。位。を。考。へ。小。遠。里。より。五。六。十。步。あ。一。二。  
 土。庫。の。を。幸。ひ。乾。金。埤。土。相。對。七。土。生。金。の。美。稱。小。尾。究。竟。の。處。且。這。里。よ。

ても。面。屋。より。も。天。井。を。隔。る。廊。下。續。け。遠。く。昔。日。毎。の。往。還。不。便。の。り。れ。が。酒  
 那里。を。用。へ。快。々。准。備。と。の。と。い。わ。れ。て。大。丈。次。怡。悦。不。堪。甚。可。泥。匠。と。召。よ。ま。せ。  
 塗。工。の。云。云。と。止。言。示。一。あ。ろ。ろ。と。七。僮。僕。們。の。土。を。採。り。庫。裏。東。西。の。送。り。な。く。  
 本。七。他。所。を。移。さ。り。總。て。舌。命。の。指。揮。に。任。し。て。庫。内。の。爐。を。造。る。形。状。は。八角。用。り。て。  
 各。寸。尺。の。八角。の。是。八卦。と。表。す。皆。の。法。は。後。の。終。日。と。作。り。果。け。り。火。を  
 乾。け。れ。ば。用。ふ。足。れ。り。と。茶。種。の。舌。命。が。携。来。す。貯。藏。の。の。れ。と。只。承。と。承。  
 る。と。の。餘。の。東。西。の。買。ふ。れ。も。及。び。舌。命。の。快。速。の。爐。を。造。り。し。て。勞。ふ。て。昔。日。昔。日。道。  
 吉。日。へ。今。宵。母。金。と。丹。辨。小。斂。て。翌。より。法。と。初。め。と。の。大。丈。次。あ。ろ。ろ。と。所。藏。の。圓。  
 金。千。兩。と。竊。ふ。あ。つ。つ。取。出。と。を。依。舌。命。の。遮。り。と。舌。命。の。指。揮。と。黃。  
 銅。と。の。造。り。と。火。函。釀。銅。碗。碟。も。あ。る。限。り。取。出。せ。し。七。伴。の。金。と。共。俱。小。水。  
 茶。種。と。相。加。え。最。大。に。丹。辨。小。斂。と。泥。と。厚。く。封。じ。火。口。三。方。と。開。け。け。り。癖。



果て舌命がのち。母金の三又寡の千両を修法はより十倍の利を以て疑ひ  
 ち。かれも三金の一朝の煉取りを以て八六十四日おし初め成法を以て疑ひ  
 その間老実多。小断二名を隷置て昼三番夜二番由勤り炭を継いで須  
 更も火を絶たせざる。炭を継ぎ折衷食道直に指揮せん件は小断二名の外の爐  
 邊近づくを許さず。備不淨のもの立入らば丹丹の壞るもの多し。母金の其小  
 銷散して。時と唾ひの後悔せざるの義よく。歳む。貪道の罪より一晝夜  
 修法あり。炭の多し。継ぐべし。第二日の朝より七件の小断を隷置。是より後  
 所作も。公利の折るるを以て等閑をまゐる。子寧は説示廿六丈次深く感  
 服して。這夜日土庫と銷して俱に退けり。徳而その詰且舌命の以て爐邊不到  
 して。火を絶たし法と修して。二名の饒小向の外の外。次の日まて出く來む。春時丈次が  
 母の命。八卦爐の炭継ぎ凡作と京市を以て相応り。死役をれも。他人心浮る

考て老実あるもの。折るるを以て。仁八五郎を以て。豫て心釋を  
 法年十六と十五。兩個の小断小分付。第二日の朝より七件の爐邊を隷置。大  
 丈次の舌命と共に。其頭を看輪るもの。その樂しむ。又煉り。その  
 思惟る。這九還丹一鬼也。一萬金の所得あり。それを母金小丈又煉り。その  
 萬金凡三番折か。百萬金の富人者。徳も短る。拵る。春時秋  
 外。秋時夏時。夏時。田畑の風雨の患ひ。況綿と採り糸と繰り。織出さ布を  
 とい綿は豊作稀なり。子間の。その利薄く。又牧の駒も。有身てより十二不  
 月の光陰を過して。一疋ある。一疋ある。良馬の得る。本錢寡  
 り。利の。這仙術の。次助。遇ひ。冥加。餘る天の錫。昔金が一期。い。子  
 子孫々を。相傳へ。その富諸。敵。一。呵愛。たと。肚裏。目算。大。大  
 無慾。近守。錢。祈の。ある。祝ひ。他。事。も。日。毎。小。舌。命。と。管。待。を。東。西。の。費。を



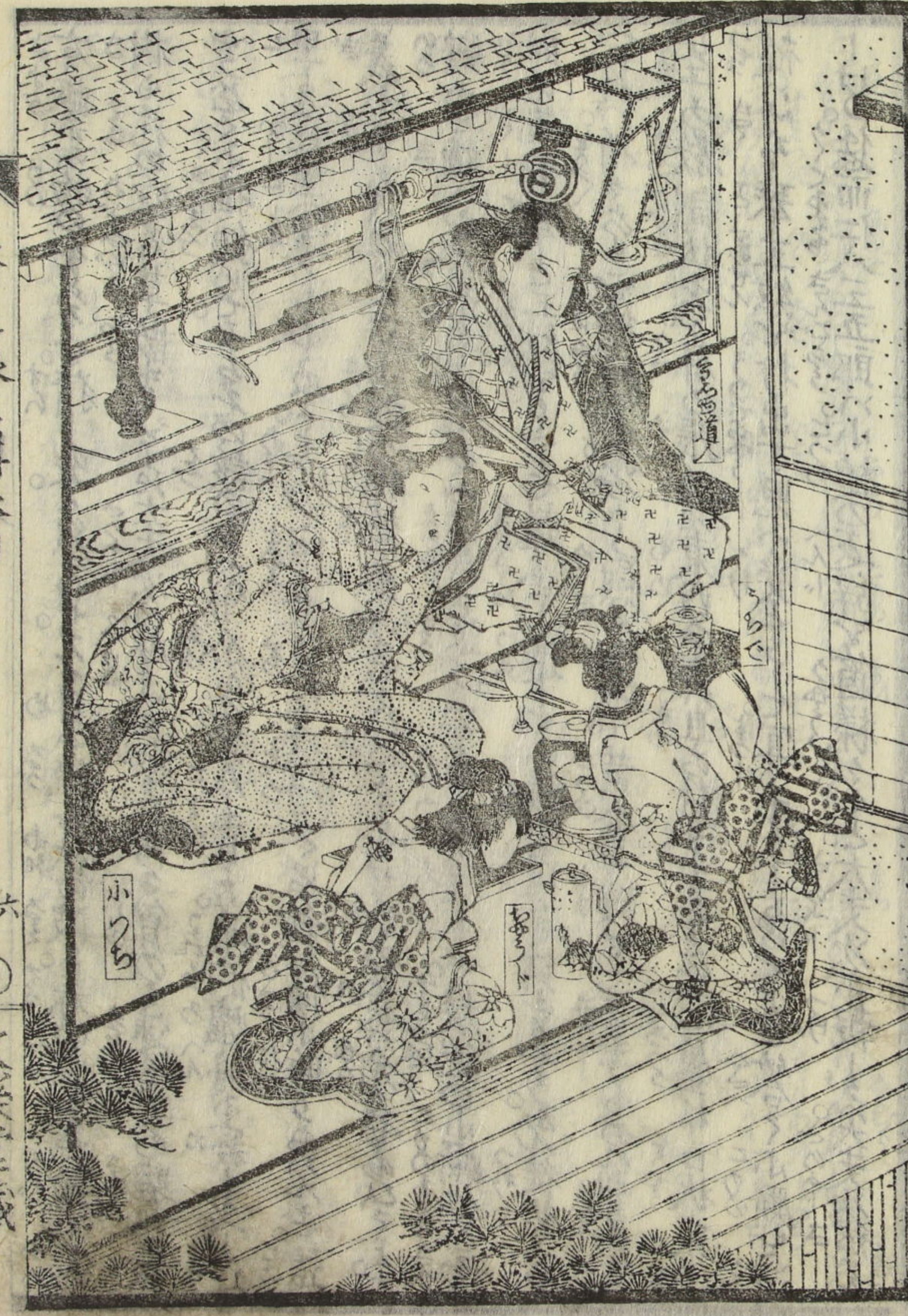
些も厭ひ。その身も共小酒うち喫く。世の雑談。白日を消し。事情を知らぬ。奴婢の  
 疑訝。多きも。那爐の不老不死の仙丹を煉る。あやうん。不口足る。死も  
 る不飲。ふの壽命。あそと。あ笑ひて。心のと。あひけり。左右を。程。あ八九日。経  
 たり。有一日。又大夫次の離合。不赴。舌命小槌。不血。薦。只願。款待。折  
 り。舌命。死。白川。宿。一。個。の。山。而。人。の。上。索。未。却。舌命。小。報。る。や。の。比  
 とも母君の風の心地。と。臥。あ。ひ。より。あ。衰。へ。て。最。も。危。く。え。あ。の。あ。還。り  
 の。あ。是。の。下。と。告。ま。う。さん。と。筑。麻。の。湯。屋。へ。赴。け。那。里。あ。ま。だ。這。里。の  
 老爺。誘。引。れ。俱。不。立。出。ぬ。い。と。と。那。客。店。で。せ。い。述。と。甘。本。て。ま。あ。の。あ。の。あ  
 舌命。いら。ち。敬。馬。に。そ。を。安。う。ぬ。あ。を。れ。俺。が。母。刀。自。の。健。中。持。病。と。て。ま。う。い  
 り。旅。宿。と。累。々。由。駒。の。大。敵。齡。六。十。の。あ。ま。る。親。の。邪。熱。不。疲。勞。と。増。した。あ。の  
 然。と。危。弱。の。あ。べ。れ。什。麼。の。あ。せ。んと。當。惑。の。眉。根。と。頼。算。め。手。と。又。死。く。歎。息。の

外。る。り。と。僅。小。思。ひ。か。へ。けん。手。と。鮮。に。大。夫。次。ま。ら。ち。對。ひ。て。目。今。望。せ。あ。か。如。母。の。病  
 つ。れ。あ。る。着。重。く。あ。ま。り。と。信。じ。て。一。日。も。千。秋。翔。る。た。あ。と。恨。の。三。口。速。不。立。か。り。て。看。と。る。べ。う。の  
 思。へ。も。救。不。賤。妾。們。を。推。方。な。れ。路。の。程。愚。意。不。任。せ。後。遲。滞。及。ん。當。惑。の。あ。ま。の  
 い。と。あ。と。大。夫。次。慰。め。を。不。慮。の。あ。を。御。辛。勞。真。愛。を。分。り。よ。も。る。遮。其。母。君。を。あ。の  
 年。來。を。病。不。御。座。と。さ。只。雲。相。露。の。輕。症。を。程。る。瘡。の。あ。る。ん。然。と。も。急。不。還。ら  
 ん。と。思。ひ。あ。る。御。建。の。の。依。迷。一。置。の。然。れ。急。だ。あ。と。路。次。の。煩。雜。の。あ。る。べ。う。の  
 母。君。本。復。さ。る。ひ。て。尊。師。光。臨。あ。ま。り。の。老。拙。預。り。あ。る。ん。の。あ。の。甚。慮。と。他。事。も。あ  
 る。と。正。首。相。譚。へ。か。舌。命。の。連。り。不。感。嘆。と。そ。を。辱。死。死。計。ひ。貧。道。方。寸。既。に。察。れ。て  
 今。ゆ。深。念。よ。及。か。の。左。右。も。右。も。交。遊。の。大。意。不。甘。へ。賤。妾。們。も。不。且。く。這  
 り。許。の。御。厄。會。よ。る。あ。九。還。丹。の。修。法。あ。六。十。餘。日。の。限。り。あ。貧。道。宿。所。還。る。に  
 後。母。の。病。着。瘡。ら。で。萬。一。の。あ。の。あ。も。け。よ。う。と。五。十。日。の。間。の。再。來。へ。下。炭。懸。の









六

女笑止

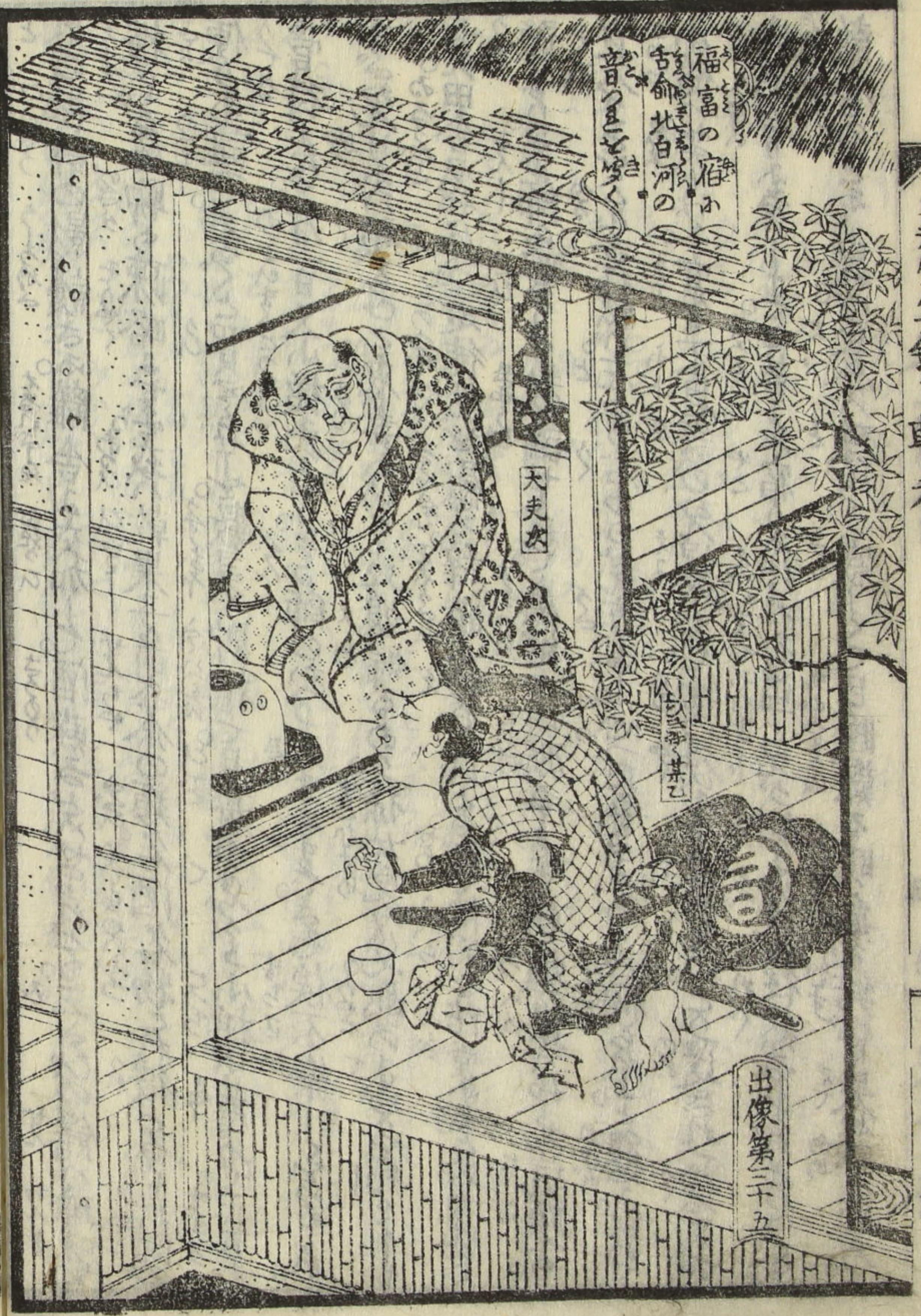
小乙

主人

小乙

茶

福富の宿小  
吉命北白河の  
音の足と



天夫次

小乙

出像第二十五



有敷糸小物のあつらひを猜し。火といひて見る目も流し秋の波も春の心のそと動く。光  
 樹の花の空名草散まきとて大夫次ハ辱さと恥るる身も曾のそ連りあつち騒れぬ  
 今も小推鎮めてそその該の目か。今も今宵も咱們爐邊不寝まへ。這  
 里より那里へ遠くもあぬ。主人が宿直も立たずか。つとめられ。優れ睡りぬん。這  
 義小任しぬね。とよと小槌の推禁めていつと然るをせぬ。その義の允さぬひくと  
 辭かを聴くも真実立ち。あつち自ら退る。大夫次ハ且くと炭継の小断仁八三五  
 郎小筑紫琴と云々。と離合の遣して小槌の遣してのたまふ。あつち徒然あ  
 へられ折々あつちを標持とみづる慰めぬか。黄金も讀せ。策子もあれと云くと  
 策子の教訓状を肩の張る。東東西西まよ。且つこれのまよと心屬れ口状成小  
 槌の音も琴三弦を打出し見小受とすと。宜くまういぬひと。と女も小断を返  
 けり。恁而仁八三五郎ハ小槌の返辭と箇様々と大夫次不報し。大夫次然るを

と領してを退るとたりけ。兩個の小断と呼ぶををれ候ね。あり。若們的に。比  
 よ。炭継の役も宛られ。暇あふ似れ。夜毎も二度起きると走行の自由な  
 らぬ。倒小窮屈あつち道人附添居られ。別小子細もあつち。若們的に。那  
 人且くと這首不在らぬ。爐邊の進退心配する。尙毫もろも。行心あつち。年歳申斐も  
 る。俺が面と道人ハ辱くのま。と人のぬも。失脚あつち。恁れ。俺も今宵も土  
 庫の内小起臥して。炭も手づから継ぐ。夜書とのま。若們的に。任せぬ由断。似  
 たり大抵の心も屬く。用支あつち。召不。若們的に。且退して。母屋拵せぬ。とら  
 きて。勢も兩個の小断ハ一議。及ぶ。心やん。そも辱れ。ん計ひ。あつち。ひる。日毎も  
 炭と燃折の必召せぬ。時刻あつち。身も淨うと。あつち。指揮を。受へられ。呼  
 愛と。と自祝して。想の。稽小敷糸。狙猴の山も帰る。か。如く。ち連立。母屋も  
 僮僕隔室を罷りけ。小後又大夫次の件の。緯の趣と阿健も。説示と。是より











利益のあつて己をたゞとて相撲ふごとく引立て理なき臥簾へ伴ひけり。然而小槿の  
 曉方お起別れとつると云大夫次も其伴の身を起下伏持とて既小槿の想ひを  
 魚水の契りを結ひる。君の爲にいとくもなれ。餘命とりて惜む心の花の香を留め  
 老樹として嫌れぬ。夜と母々々のかみ。故を猶りたすも祈るの事。小槿の嘆かむを  
 とを宜いさるもゆるむ。濡ぬ先を露とも厭引ふ曳ぬ小車。重情を棄せ  
 られ。王の祟も這身の科も。欲ぬ男女の色情。老曾の森若松の  
 立添ふ例も世も。願ふ今の御心の妻をせぬ。獨宿もせ下寝せむ。せ  
 然るも立寄り側ゆ打出丁見が臥くを。他們が熟睡とて後の暗踊を忘れぬ。と  
 契る辭の虚情。虚中の美ぬ大夫次の廊下。續きの後朝も別。草の床離れ  
 ぬ。居を故とて離合へ還け。是より後大夫次は小槿と密會ふ。身の樂に  
 志す。内外の人の誹謗を。活業の皆老僕不仕と丹爐のるを。閑於

是は折々のみ只炭と継ぐの願く。舌命がへり。未だもわれと。あつた。小槿の  
 色不瀾れ。痴情の堪えぬ。盤纏の爲小槿。竊の金を贈り。小槿の推し  
 ぬ。小槿の觸れ。縁も知らぬ。如く。良人の昔。自由。東の西の。只何時  
 ら。大夫次。推返して。任。実情。と。辱。贈。視。那道人  
 る。浮世の。鏡。髪。飾。衣。裳。贈。視。那道人  
 疑る。媒。介。東。西。進。受。何。と。極  
 誠と表。下。あ。枉。寸。志。後。多。賠。如。推。薦。成。五。兩。成。三  
 面。裏。中。と。費。三。番。及。び。左。右。程。古。命。北。白。川。四  
 五。十。日。歷。九。還。丹。の。煉。法。も。満。足。の。目。近。登。時。大。夫。次。の。仙。傳  
 無。上。九。還。丹。八。八。六。十。四。日。也。初。て。成。就。と。安。の。目。子。も。既。四。日。程



身小槌と土庫と夜毎此の情由ありとも。爐の頭へ屏風を建  
 不浄を避るるを丹洲の障りありとを那道人の口より承りし。丹  
 爐と披る一萬金の大利を獲るべし。又その中を造化の道人は暴病の嬰  
 子。浴這地小来りて克いで竟小身まゝとある。謝礼の金を分る不及。憐  
 小槌と側室をせむと十二分の造化の萬事小幸ひあり折るれば是れのみ知るべし  
 らる。必く多く多れぬ。計校の何月の愚痴妄想も。然る限の奈麻手美の甲斐の  
 白峯に起る浮る雲の富貴自在樂。此類のけり。憐れいよ。三四日経て  
 舌命の兩個の徒者と俱と白川より。其の安否を問ふ。舌命の  
 然氣を離舎を赴きて。舌命の對面。且その老母の安否を問ふ。舌命の  
 全嗟歎と。はれ小槌の母親の鍼灸茶餌の效も。身まゝ。一日の山出人の  
 這里到着せしと。彼彼同日。され未期あり。あつたけ。送藏。今も亦

へうの由。道中。かある。と知る。夜を日。継て宿所。甲斐の  
 傷悲泣。堪ざり。却ある。安否の。過七々の。追薦。讀經  
 日を送り。け小槌。所へ疎。潤。修。法。成。熟。の。日。子。も。既。近。つ。た。こ。の。ハ  
 四十九日。過。と。そ。の。後。被。禱。人。又。首。途。と。風。起。晚。く。宿。と。一。日。片。時。由。ぬ。る。  
 飛。が。似。来。つ。る。今。日。則。主。は。快。々。丹。爐。と。披。く。と。の。れ。て。大。丈。次。一。談。及。後。  
 且。その。不。善。は。悼。と。演。で。母。の。真。愛。不。了。追。慕。の。袖。も。乾。を。あ。ん。を。這。方。の  
 の。も。憐。れ。も。脚。あ。る。不。槌。ら。れ。時。日。違。へ。来。ま。せ。し。大。丈。次。の。脚。深。切。実。不。感  
 佩。は。八。卦。爐。の。の。貴。教。の。如。く。今。ま。の。由。ぬ。る。折。々。小。炭。を。繼。れ。心。安。く。思。は。れ  
 上。俺。の。る。る。小。槌。刀。袵。も。了。髪。違。也。俟。不。樂。て。徒。然。の。と。あ。り。けん。け。ハ。一。時。小。こ。り  
 復。し。と。憐。れ。送。小。恙。の。對。面。那。骨。小。水。母。の。久。筋。刀。屬。ま。し。ら。を。嬉。し。く。以  
 ま。け。の。へ。小。槌。の。膝。を。找。め。の。比。より。稍。久。う。脚。厄。會。ま。り。の。ゆ。り。立。安。が。為。不。致







隸れいられぬの爐頭ろだうあををままして何なにと母屋ははやへ退ひりた。あのと忌慢きまんのあれごと丹爐にんろの不ふ  
 浄じやうふ犯はんされて俺おれが法術ほふじゆつの破やぶれる悪あくまま報ほう上じやう俺おれがと夜よ日ひの做せせし悪あくままのあらう  
 ん快かい々々報ほうようふふとと緊きんしく回まわれる而しか個このの小の所の頭あたまをを檢しらべる目めをを注つして共とも侶りよふ  
 答こたへるや否いな俺おれ們らへの身み比ひらる炭すす继つぎの役やくとと免まんじられて母屋ははや掙あるる一いつはは這この爐のの  
 多おほ與よらる夜よの目めひひと東人あづまひとののままつつ繼つぎせしひひとと舌命しやうめいへ領りやうててそれそれ情じやう  
 由よしと猜そたりたり這この疑ぎひひ小こ槌づちありありといいひひ位ゐととままつつててそれそれ後のち妻つま俺おれが這この丹爐を  
 破やぶりらぬぬ汝なんぢるるんん甚い麻あるる奴やつと這この里の宿しゆくで秘方ひかうの丹爐を汚けがれる快さく詳しやう招ま  
 道みちせしぬぬ目めの物もの見みせんせんと罵ののりり鐵てつ如意にと振ありりつつ七なな摺すりんと身みと起た其その大おほいい次つぎ  
 小こ槌づちへ吐つ嗟あと駭おど怕おそれる逃にげると遺ありりの過あままるる不ふ由よしと身みと起た其その大おほいい次つぎ  
 慌あわ忙いにに推お隔へ摺すり禁かめめとと師しの腹はら立た理りののれるああるる此この女むすめ中ちゆうの科かののまま皆みな先ま  
 拙あつがが行いききるるいいと過あままるる科かのの屬ぞくと老拙らうあつの勸かん解げとと仕しらん先ま且かつ怒いかれる納なめめぬぬと

辞ことを盡つく推か寛あ解げ仁に八はち耳みみはは恁あ々々と事情じやうじやうののままれる仁に八はち辱はんんとと母屋ははやへ赴おもひひ且かつ一いつ個このの老僕らうぼくが土庫とこの戸口かどへへままつつてて大おほ夫おとこ次つぎををままつつてて身みを  
 起たしし找たづねね向むかひひとと束たば金かねと受うけけてて昔むかしの席せきはは立たりりととああるる件けんの金かねをを舌命しやうめいに  
 贈くわりり却かえりりああるる最さい薄はく義ぎのの過あままるる料りやうの受うけけとと小こ槌づち刀たうの許ゆるささし  
 るる彼かれれは優あままるると賠さい話わの包つつ紙しを解ときき金かね七なな兩りやう二分ふぶんありあり舌命しやうめいに  
 ともとも復たがひひ大おほく性しやう起たるるああるる何なに事ことを浅あままるる密ひそ夫おとこの賦ふ價げと七なな兩りやう二分ふぶんと俗よののへ  
 とと俺おれかかららの功金こうかねを受うけてて小こ槌づちとと允ゆるさんさんやや畢竟ひつじやう咱われ們らのの贖あげげとと這この号ごうの和わ解げ  
 言語げんご同どう語ご恁あ々々とと一いつ身み立たてて那あの後のち妻つま奴やつとと摺すり懲ちやうとと招ま道みちとと奸けん夫ふとと俱ともに推お併ありり  
 四段しよだんをを入いれる其その首くび退ひれると敦とん圍ゐて罵ののりり狂くると大おほ夫おとこ次つぎへへままつつてて推お鎮ちんめめるる外ほか面めんをを  
 一いつ老僕らうぼくはは恁あ々々と分わけてて金かねを取とりり一いつ足あ躡ありり數かずを増ましてして五十ごじゆ兩りやうとと遞たがひひ  
 舌命しやうめいへへ美み引ひきき氣け色しきををいいううままとと罵ののりり狂くるとと絆はりり果はるるああるる大おほ夫おとこ次つぎへへ







停在主の噂小日と銷をその隠れあふれ何鍵より傳せ驚か且呆  
 色心苦多く思ひたり。さるるゆゑを這次の日の富國の守佐々木高頼  
 ける捉山柴太郎玄繩と呼ぶ武士野兵廿餘名を從へて呼門せ福富屋宿所  
 へ直と推寄せまゝ前後の門より乱入して御談まと呼子呼掛玄閑客房書院  
 編室庖厨中間僮僕隔浴室雪隠寢木場土庫離舎小至まを奥も  
 甚端ともいふ甚送る隈多く檢宅する騒動のさうもあふれ奴婢們は老  
 僕さ景市丸作甲乙と多駭怕れ拍揮々隠れんとて度と喪ひす小背を  
 權惱され吐嗟と叫ぶも多々けり當下福富大夫次の慌惑ひら納戸より走れ  
 玄繩の身邊近く跪膝節戰之慄れる訛声高くゆり絞りと殿達雲時等  
 せあ在下福富大夫次へ何もの御用う知るも這身小ちと檢宅せざる罪ありと  
 一の不え人さへ火の雲といひせも果に捕まの頭人玄繩信と疾視七黙れ大夫

次科るて俺這處へ向ふ。あちのまをわらねる守より死下知の趣の大畧と告示  
 さえ近く找し兼れ近屬菊池武俊が殘黨野衾鍛冶郎有藤と云ふ不  
 蹄と鐵屑と喚做るへ他叛逆の志ありと。竊に修驗者打粉て有驗觀主  
 舌命道人と偽稱す。一個の淫婦と兩個の了鬘と相携へ京畿五ヶ国を遊  
 歴と豪農富商を偵察し。專錢帛と貪界各軍要金せす欲と世の  
 風声ふせえく他當國あもあると守の賢慮あるふより豫密のわ下  
 知と玄繩も亦奉てその物色を探るわらひぬ比より汝が宿所は那野衾の  
 鐵屑鍛冶郎並ま類の賊婦們を留置より知のあて慥に告訴するから  
 俺速ふらち向ひ不意ふ起て件の逆徒と搦捕んと思ふより部を定め相入を檢  
 宅せし所の所以をいふと逃せ汝隠せ汝那鐵屑們の影もえを什麼何方へ隠  
 た愉快々稟せしふとと辞せり責問れる大夫次の駭は初々曉得る騙





左右  
くれを  
久礼畑の夥兵酷  
福富と檢宅を

中  
柵山玄繩大夫次と囚

天丈次

美少平録二輯卷四

十六

美少平録二輯卷四



出像第卅六

美少平録二輯卷四

美少平録二輯卷四











憑むる。俺身つらく思惟る千金の子。市小死を。世の人は口順む故事もある。  
 久礼畑の陳所。有司の人情を贈りて。竊の因縁を乞まら。大人の為る。  
 善根功德地獄の製度。も金の依る利益。あて獄金の阿責を脱れんとせよ。  
 義と相計ゆて。密出ま相譚て。金銭両通とせし。凡作の數へて。宣ふ趣。  
 理の恩を受る家翁の窮厄救ふ。折るとも。素より願ふ所。  
 這金中へ尚寛。五十兩のゆり。振被足。ゆりんと。阿鍵の異議も。  
 意の任し。數を増て。ゆきひ金と。遞与せし。凡作れを受ると。その曉昏。後門。  
 出て久礼畑へ。赴り。便り求め。大夫次。林示獄中の安否。阿宗他。觀音寺の。  
 城へ送遣られて。這首。火と。むと。す。六件の金。並。散ま。次の夜の。紛れ。福富の。  
 宿所へ。還り。竊の阿鍵。報。其久礼畑の陳所。相識者。便り。徴め。  
 件の金。と。罇。酒。菜。卷。衣。を。と。買。と。その餘の東西。形。の。く。彼。此。の。

志つ。家翁の。頼。家翁の。那首の獄舎。觀音寺の城内へ送られ。

益。寺へ。赴。又。一段。仕。守の御座。本城の。有司。

愚意。推量。百兩。足。三百金。費。便宜。

巧。阿鍵の眉。頼。又。便。財宝。費。

取。の。惜。御。大人の。一箱。大金。古。

命。掠奪。土庫。守。封。一。體。臂。近。然。は。の。間。

財。の。快。更。の。行。の。凡。領。の。受。心。安。ら。咱。們。宜。

遠。大。義。の。快。更。の。行。の。凡。領。の。受。心。安。ら。咱。們。宜。

誘。吉。左。右。の。せ。ま。る。べ。お。金。の。三。少。の。整。と。期。を。推。と。己。子。舎。







此作は... 命の形... 年を... 記す... 清官... 察し...

この折小影と隠して身の安徳と料らぬ。後悔其首小立ちあつん噫嘻介と  
と計校む悪心分別を定りければその詰朝宿りを出て往方もあるべき  
這次の日福富の宿所ぬ北白川へ赴ける。老僕小忠二がかり来て竊に阿健  
報るも。在下那地へ赴きて舌命の宿所と詢ねし里人走てこれを知りて比目  
石工も修験ぬるものとの絶て一人あつたをりければ忽地田主を失ひて  
涉獵ぬる。然小便宜とゆふり又ゆる疑感あて。尚洛東より白川橋の頭  
らま。とゆふり又京師へ赴て。その投まをる素よりあはれぬ舌  
命の在処の知れざるに介在下洛外へ還る日世の風声かすあり。野合衣有廉  
と喚做まりの即菊地の家臣にて舌命と別人之那舌命が原名の即鐵屑鍛治  
郎あつぬる。永正六年の春備中入大江元弘主の討滅される。肥後洲山本郡飯  
田山の賊の頭領川角頭大連盈多隊の従ふる小賊の連盈多弁銀死せ折他の

両二個の等類と共侶あつて山寨を逃亡。彼北へ潜ひて。或の廻国の修行  
者小打粉て宿せ家の東西を竊ら。或野伏山立で旅客を趕威。年来  
獲鴉の悪行と舌とせしめる。近属の又修験者小打粉て仙傳丹野の奇  
法と倡へ貪林き意慾の豪農富商と迷とてその錢を奪ふ。一個の美婦茂  
嬌鳥と事件の美婦の鍛冶郎と深く契り。遊行女鐵屑竊小件の遊女  
奸計と説示して豫をあらうとゆふ。却その妓院の親方あまき金と取せ遊女茂  
借て。その使小三板も相推考へ遊歴する。故に那遊女と久く返る。あま  
し。妓院を鐵屑鍛冶郎の賊する。と知らぬ。中央錢の具に願て饒と放遣  
るとの任れも件の美婦の何地の柳巷の遊女とらん。あれを巨細知れるの  
任程小の風声を。京を鎌倉も。追捕の沙汰のありぬ  
から。戦世の癖を。攻戦軍旅の違ふて。今及ぶと。あま舌命の鐵屑



鍛冶郎の出没不測の一段ありき。世の人は遂に夢醒めて菊池の残黨多りと  
いふもその言は実なるに南朝の武臣達は一箇も忠義ありぬる。あの故小残黨餘  
類の飢渴の迫りと死に至るまで緑林白波の侍と做て悪名を世に送せし者亦一人  
とてある者。這美と推量するに鐵屑鍛冶郎の奸賊へ他豈菊池の殘  
黨ありんや初他が頭領と仰たる川角頼太連盈も亦是肥後州の當時  
那連盈の武俊の徒で後逃去りしもの此彼竟に相混ぶ。菊池の黨と  
いふやあつては流すに証言とて宿の主人の口より譚ひし紙戸隔れ在下  
空の曾の内事件の遊女は出処を知らず那鐵屑の舌命が性方と索す據あべし  
と云ひかとも風を追ひ影を捕る街談衢説に拘つて日と晷も亦益々一と  
深念して立ちてそをいふれと云ふ阿健の驚かすをうらた殘賊と友垣結  
びて筑摩の湯より。這里へ伴ひのゆる薄情や日屬の萬のうへ用心深くもの志

あゝ大人の氣質に似せむ。寛屈の縲紲を釋くよも。あゝさるりの這家の滅却  
時節次と説立々々の歎を小忠も理りと思ひ共耐忍難く嘆息の外多  
すけの當下阿健の凡作の觀音寺へ遣はる事情を信々と小忠亦其は千條の  
綱のめられも這一條の果敢るも不憑に心地を去。快の末て吉左右を安せ  
よめと指し折る。專凡作と俟程の二首あまを経ければもその信もさるる。あ  
なぞ小疑心起りて二十の足らぬ後生の許りの念を懐かして只獨行の  
と小跟られ。較められせむけすも。あゝ末を不思議なれと獨言の俟不察て一日  
胸の安き一層の苦を増し。悔れぬ小忠を迎ふ遣んと欲せしむ。有一日  
久礼畑の陳所より捉申玄繩の下行杖到來と阿健並に福富の家は老僕們  
と里の故老を召きて玄繩則下知する。大夫次の罪ありて御高林禁獄せしめ獄  
舎の内にて身まのり。他の菊池武俊が殘黨と云え。鐵屑鍛冶郎野倉有



廉くわん久ひさ家いへにかく隠かく置お置きる。そうらふ當あた所ところも。討う兵へい向むかふ。と。安やす知ちて。那な有あり廉れんを。逃にげ。罪つみ叛はん逆ぎやく果はる。ならぬ。も。招ま道どう致いたす。と。身みまろう。れ。が。寛かん仁にの。御ご沙さ汰たの。も。子こ大だい夫ぶ五ごも。家いへに。在あら。と。同どう罪ざいを。ならぬ。も。他たの。景けい老らうの。亡な命めいと。往むか方かた知しれ。る。と。是こゝれ。が。措そで。重おもく。向むかへ。と。是こゝの。上うへの。大だい夫ぶ次じが。媳めかけ婦によの。鍵かぎ孫まご女むすめ景けい金かねと。比ひ皆みな是こゝ婦によ女子むすめの。夕ゆふぬ。れ。が。縁ゆかり坐まの。謙けん勤しん預あら。ら。ぬ。奴やつ婢めかけ們らも。總すべて。進すす退たいの。主しゅ従じゆの。隨ま意いを。ならぬ。も。大だい夫ぶ次じが。罪つみ輕かろく。ならぬ。も。莊じやう園えん家か作さく雜ざ具ぐ具ぐ送おう。と。没な收しゆせ。る。も。故こ老らう們ら送お漏ろうれ。と。籍せきで。寫しやえ。あ。げ。比ひ皆みな是こゝ守しゆの。死し慈じ悲ひを。ならぬ。も。辱はく。と。思おもひ。ならぬ。も。あ。の。死し言ごん言ごんあ。ら。う。と。最さい嚴げん小せう告こ示しせ。の。衆しゆ皆みな存ぞん一いつ言ごん兼けんと。ち。連れん立たて。と。退たい出しゆけ。と。然しか程ほど小せう福ふく富ふの。家いへの。奴やつ婢めかけ們ら阿あ鍵かぎ久く礼らい畑はたけの。陣ぢん所ところよ。の。死しの。末すえ々々御ご設せつの。趣しゆ云いと。告こ言ごんを。寫しや傳でん胆たんを。洗せんと。猛まう小せう吉きちの。起おり。と。籍せきら。れ。奴やつ婢めかけ們らと。咱わがが。東とう西せい主しゆの。東とう西せいと。も。の。入いら。れ。と。金かね三さん三さん十じゆ兩りやう搔か攪か攪かひて。暇ひまを。請こい。も。請こい。ぬ。も。の。慌あわへ。も。出いで。と。絆はの。紛まね。景けい市いちの。金かね三さん三さん十じゆ兩りやう

の。編あせ。と。體たい鼻び禪ぜんに。結むす着くて。身み装まい。る。を。投なげ。と。死し親おや里さとを。阿あ容よう々々と。と。留とどま。る。け。の。後のちの。死しの。往むか方かた心こゝろを。ならぬ。も。此こゝ就つ彼か死して。阿あ鍵かぎ黄わう金こんが。心こゝろ裡うちに。衣いの。石いし宗そう誅しゆせ。ら。れ。て。妻さい子し離り散さんと。廢はい坐ざ死しと。窮きゆう鬼き然ぜんが。盛せい者しや必かな衰すい有ある。と。轉てん變へんの。ゆ。ら。る。の。身み後のちの。と。只ただ小せう忠ちゆう二にと。景けい市いちの。幾いく間まも。建たて。ら。る。家いへ三さん庫こ三さん送お一いつ措そて。里さと盡じん頭かぶる。人ひとの。空くう屋いつを。購かう求もとめ。て。程ほどを。ならぬ。も。比ひの。煩わづ雜ざの。目めも。當あたら。れ。奴やつ婢めかけ們ら光くわう景けい之の知ち牧ぼくも。田でんの。畑はたけも。戸こ帳ちやうの。照あら。と。嗣し送おる。没な官くわんら。れ。と。死しの。幸さいひ。小せう隱いん田でんの。主しゅ僕ぼく四し五ご人にんの。衣い食じきの。料りやうの。死しの。里さとの。故こ老らうの。私し意いを。ならぬ。も。と。只ただ口くちを。残ざんを。任にん家か折せち。と。あ。ら。る。子こと。あ。ら。る。親おやの。脱だつ落らくる。阿あ鍵かぎの。老らう僕ぼく小せう忠ちゆう二に里さとの。故こ老らうの。商しやう量りやうと。黄わう金こんと。和わ泉せんの。左さ界かいの。浮う宝ほう屋いつへ。預あら。と。程ほど徒たなる。次じの。日にち小せう黄わう金こんを。行ぎやう轎きやうふらち。乘まと。光くわう実じつる。里さと人にんと。景けい市いちと。謀ぼうて。遣けんけ。阿あ鍵かぎが。足あら。る。用よう心しんの。今いまの。僑きやう居いの。荒あ々々と。死しの。親おや子この。零ぜい令れい落らくを。侮あら。と。死しの。久くら。る。と。不ふ



測の所<sup>さ</sup>ゆ<sup>ら</sup>と<sup>お</sup>ま<sup>り</sup>と<sup>あ</sup>ら<sup>う</sup>と<sup>と</sup>信<sup>しん</sup>計<sup>けい</sup>以<sup>い</sup>と<sup>ま</sup>え<sup>ら</sup>然<sup>しか</sup>左<sup>さ</sup>界<sup>がい</sup>は<sup>は</sup>巨<sup>きょ</sup>商<sup>しょう</sup>浮<sup>う</sup>室<sup>しつ</sup>屋<sup>え</sup>并<sup>びやう</sup>三<sup>さん</sup>  
 太<sup>たい</sup>の<sup>の</sup>船<sup>せん</sup>積<sup>せき</sup>氏<sup>し</sup>を<sup>を</sup>阿<sup>あ</sup>健<sup>けん</sup>が<sup>が</sup>叔<sup>しやく</sup>父<sup>ふ</sup>へ<sup>へ</sup>黄<sup>わう</sup>金<sup>きん</sup>が<sup>が</sup>為<sup>な</sup>る<sup>る</sup>從<sup>じゆ</sup>母<sup>ぼ</sup>大<sup>だい</sup>叔<sup>しやく</sup>父<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>荷<sup>かり</sup>  
 三<sup>さん</sup>太<sup>たい</sup>の<sup>の</sup>教<sup>きやう</sup>書<sup>しよ</sup>を<sup>を</sup>受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>阿<sup>あ</sup>健<sup>けん</sup>が<sup>が</sup>書<sup>しよ</sup>目<sup>め</sup>簡<sup>かん</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>黄<sup>わう</sup>金<sup>きん</sup>を<sup>を</sup>受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>京<sup>きやう</sup>市<sup>し</sup>も<sup>も</sup>窮<sup>きゆう</sup>を<sup>を</sup>煮<sup>に</sup>た  
 は<sup>は</sup>鍋<sup>なべ</sup>の<sup>の</sup>類<sup>るい</sup>を<sup>を</sup>煮<sup>に</sup>た<sup>た</sup>の<sup>の</sup>為<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>他<sup>た</sup>に<sup>に</sup>留<sup>りゆう</sup>置<sup>ち</sup>て<sup>て</sup>里<sup>り</sup>人<sup>にん</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>返<sup>かへ</sup>り<sup>り</sup>却<sup>しか</sup>又<sup>また</sup>阿<sup>あ</sup>健<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ふ</sup>  
 次<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>亡<sup>わう</sup>骸<sup>がい</sup>と<sup>と</sup>せ<sup>せ</sup>ん<sup>ん</sup>為<sup>な</sup>る<sup>る</sup>小<sup>せう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>次<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>盤<sup>ばん</sup>纏<sup>でん</sup>と<sup>と</sup>取<sup>と</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>觀<sup>くわん</sup>音<sup>いん</sup>寺<sup>じ</sup>へ<sup>へ</sup>遺<sup>い</sup>け<sup>け</sup>れ<sup>れ</sup>小<sup>せう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>二<sup>に</sup>  
 夜<sup>よ</sup>目<sup>め</sup>不<sup>ふ</sup>續<sup>じやく</sup>と<sup>と</sup>走<sup>そう</sup>り<sup>り</sup>那<sup>な</sup>里<sup>り</sup>へ<sup>へ</sup>走<sup>そう</sup>り<sup>り</sup>御<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>主<sup>しゆ</sup>の<sup>の</sup>亡<sup>わう</sup>骸<sup>がい</sup>と<sup>と</sup>乞<sup>き</sup>水<sup>すい</sup>の<sup>の</sup>煙<sup>えん</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>白<sup>はく</sup>骨<sup>こつ</sup>を<sup>を</sup>  
 壺<sup>つぼ</sup>の<sup>の</sup>斂<sup>れん</sup>め<sup>め</sup>を<sup>を</sup>推<sup>おし</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>阿<sup>あ</sup>健<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>胸<sup>むね</sup>且<sup>かつ</sup>寒<sup>さむ</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>香<sup>かう</sup>華<sup>か</sup>と<sup>と</sup>向<sup>かう</sup>看<sup>くわん</sup>經<sup>きやう</sup>と<sup>と</sup>通<sup>つう</sup>宵<sup>せう</sup>成<sup>じやう</sup>之<sup>の</sup>次<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>  
 日<sup>にち</sup>の<sup>の</sup>香<sup>かう</sup>華<sup>か</sup>院<sup>いん</sup>へ<sup>へ</sup>安<sup>あん</sup>葬<sup>じやう</sup>と<sup>と</sup>密<sup>みつ</sup>々<sup>たく</sup>の<sup>の</sup>追<sup>おひ</sup>薦<sup>せん</sup>の<sup>の</sup>法<sup>ほふ</sup>燈<sup>とう</sup>讀<sup>どく</sup>經<sup>きやう</sup>形<sup>けい</sup>の<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>く<sup>く</sup>丁<sup>てい</sup>寧<sup>ねい</sup>の<sup>の</sup>執<sup>しやく</sup>行<sup>ぎやう</sup>に<sup>に</sup>  
 日<sup>にち</sup>を<sup>を</sup>經<sup>きやう</sup>る<sup>る</sup>墓<sup>ぼ</sup>表<sup>ひょう</sup>の<sup>の</sup>石<sup>いし</sup>を<sup>を</sup>建<sup>た</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup>這<sup>こ</sup>時<sup>じ</sup>も<sup>も</sup>も<sup>も</sup>凡<sup>ぼん</sup>作<sup>さく</sup>が<sup>が</sup>信<sup>しん</sup>絶<sup>たつ</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>阿<sup>あ</sup>健<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>  
 小<sup>せう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>二<sup>に</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>横<sup>よこ</sup>死<sup>し</sup>と<sup>と</sup>決<sup>けつ</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ふ</sup>次<sup>じ</sup>が<sup>が</sup>過<sup>か</sup>七<sup>しち</sup>々<sup>たく</sup>の<sup>の</sup>好<sup>かう</sup>事<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>執<sup>しやく</sup>行<sup>ぎやう</sup>せ<sup>せ</sup>毎<sup>まい</sup>亦<sup>また</sup>凡<sup>ぼん</sup>

作<sup>さく</sup>が<sup>が</sup>苦<sup>く</sup>提<sup>だい</sup>さ<sup>さ</sup>吊<sup>たう</sup>も<sup>も</sup>涙<sup>なみだ</sup>の<sup>の</sup>袖<sup>そで</sup>の<sup>の</sup>雨<sup>あめ</sup>霽<sup>はら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>歎<sup>なげ</sup>た<sup>た</sup>目<sup>め</sup>を<sup>を</sup>弥<sup>や</sup>阿<sup>あ</sup>健<sup>けん</sup>の<sup>の</sup>良<sup>らう</sup>人<sup>にん</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ふ</sup>次<sup>じ</sup>を<sup>を</sup>  
 い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>思<sup>おも</sup>ひ<sup>ひ</sup>出<sup>で</sup>る<sup>る</sup>憂<sup>うれ</sup>苦<sup>く</sup>の<sup>の</sup>堪<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>動<sup>うご</sup>も<sup>も</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>ば<sup>ば</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>臥<sup>ふ</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>け<sup>け</sup>を<sup>を</sup>小<sup>せう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>二<sup>に</sup>の<sup>の</sup>獎<sup>きやう</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>這<sup>こ</sup>  
 年<sup>ねん</sup>の<sup>の</sup>冬<sup>ふゆ</sup>の<sup>の</sup>比<sup>ひ</sup>此<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>店<sup>てん</sup>舗<sup>ぽ</sup>と<sup>と</sup>修<sup>しゆ</sup>理<sup>り</sup>し<sup>し</sup>酒<sup>しゆ</sup>と<sup>と</sup>活<sup>かつ</sup>り<sup>り</sup>油<sup>あぶら</sup>と<sup>と</sup>粥<sup>かゆ</sup>粥<sup>かゆ</sup>の<sup>の</sup>隱<sup>いん</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>畝<sup>うし</sup>作<sup>さく</sup>の<sup>の</sup>在<sup>ざい</sup>客<sup>きやく</sup>二<sup>に</sup>名<sup>な</sup>と<sup>と</sup>  
 使<sup>し</sup>て<sup>て</sup>の<sup>の</sup>支<sup>し</sup>を<sup>を</sup>當<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>餘<sup>あま</sup>一<sup>いつ</sup>個<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>炊<sup>かひ</sup>妾<sup>めかけ</sup>と<sup>と</sup>一<sup>いつ</sup>個<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>小<sup>せう</sup>厨<sup>ちゆう</sup>と<sup>と</sup>主<sup>しゆ</sup>僕<sup>ぼく</sup>六<sup>ろく</sup>口<sup>こう</sup>半<sup>はん</sup>商<sup>しょう</sup>半<sup>はん</sup>農<sup>のう</sup>の<sup>の</sup>  
 世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>經<sup>きやう</sup>營<sup>えい</sup>の<sup>の</sup>業<sup>ごう</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>小<sup>せう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>二<sup>に</sup>の<sup>の</sup>精<sup>しやう</sup>悍<sup>はん</sup>と<sup>と</sup>後<sup>ご</sup>見<sup>み</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>け<sup>け</sup>る<sup>る</sup>現<sup>げん</sup>古<sup>こ</sup>川<sup>かわ</sup>の<sup>の</sup>水<sup>みづ</sup>涸<sup>かわ</sup>  
 ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>世<sup>よ</sup>の<sup>の</sup>諺<sup>げん</sup>の<sup>の</sup>虚<sup>きよ</sup>語<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>家<sup>いへ</sup>一<sup>いつ</sup>旦<sup>たん</sup>亡<sup>わう</sup>び<sup>び</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>華<sup>か</sup>以<sup>い</sup>と<sup>と</sup>地<sup>ち</sup>方<sup>ばう</sup>と<sup>と</sup>去<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>榮<sup>えい</sup>枯<sup>こ</sup>得<sup>とく</sup>  
 失<sup>しつ</sup>反<sup>はん</sup>覆<sup>ふく</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>の<sup>の</sup>迹<sup>あと</sup>の<sup>の</sup>絶<sup>た</sup>え<sup>え</sup>し<sup>し</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ふ</sup>次<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>性<sup>じやう</sup>の<sup>の</sup>慳<sup>けん</sup>と<sup>と</sup>且<sup>かつ</sup>校<sup>がう</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>支<sup>し</sup>數<sup>すう</sup>个<sup>こ</sup>  
 村<sup>むら</sup>を<sup>を</sup>差<sup>さ</sup>配<sup>はい</sup>と<sup>と</sup>暴<sup>ぼう</sup>戾<sup>り</sup>殘<sup>ざん</sup>刃<sup>にん</sup>の<sup>の</sup>行<sup>ぎやう</sup>ひ<sup>ひ</sup>る<sup>る</sup>死<sup>し</sup>只<sup>ただ</sup>の<sup>の</sup>積<sup>つみ</sup>て<sup>て</sup>散<sup>ちり</sup>と<sup>と</sup>知<sup>ち</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>り<sup>り</sup>故<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>出<sup>で</sup>宗<sup>しゆ</sup>  
 の<sup>の</sup>因<sup>いん</sup>て<sup>て</sup>識<sup>し</sup>者<sup>しやく</sup>の<sup>の</sup>評<sup>へい</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ふ</sup>次<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>當<sup>あ</sup>初<sup>しよ</sup>途<sup>と</sup>の<sup>の</sup>蛇<sup>へび</sup>籠<sup>かご</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>榜<sup>ぼう</sup>と<sup>と</sup>五<sup>ご</sup>色<sup>しき</sup>の<sup>の</sup>玉<sup>たま</sup>を<sup>を</sup>獲<sup>と</sup>り<sup>り</sup>  
 て<sup>て</sup>是<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>猛<sup>まう</sup>可<sup>か</sup>の<sup>の</sup>發<sup>はつ</sup>迹<sup>せき</sup>を<sup>を</sup>富<sup>ふ</sup>一<sup>いつ</sup>御<sup>ご</sup>と<sup>と</sup>傾<sup>かたむ</sup>け<sup>け</sup>し<sup>し</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>亡<sup>わう</sup>ん<sup>ん</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>て<sup>て</sup>舌<sup>した</sup>命<sup>めい</sup>が<sup>が</sup>為<sup>な</sup>る<sup>る</sup>謀<sup>まう</sup>の<sup>の</sup>  
 ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>舌<sup>した</sup>命<sup>めい</sup>の<sup>の</sup>野<sup>の</sup>野<sup>の</sup>蛇<sup>へび</sup>を<sup>を</sup>俗<sup>ぞく</sup>の<sup>の</sup>め<sup>め</sup>と<sup>と</sup>唱<sup>な</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>蝸<sup>かき</sup>牛<sup>ぎゆう</sup>に<sup>に</sup>似<sup>に</sup>て<sup>て</sup>売<sup>う</sup>り<sup>り</sup>角<sup>かく</sup>を<sup>を</sup>蛇<sup>へび</sup>の<sup>の</sup>





三下三録二冊巻四

九五

大の愛子と成

小六二

出像第廿七

柳帳



新川年録五輯巻四

如海堂

水油

生桂

夜更の仙女香

両香

福富の新店小師健左  
界の音靴を穿く吉呂

かり市







